

論文の内容の要旨

Female-to-Male トランスジェンダー／トランスセクシュアルにおける 男性ホルモン投与の影響

Effects of androgen administration on Female-to-Male transgender/transsexual individuals

正岡美麻 MASAOKA, Mio

緒言

文化的に定義された性のカテゴリーを超越して生きていく多様なあり方と、そのあり方で生きる人たちをトランスジェンダー(transgender)と呼ぶ。トランスセクシュアル(transsexual)という言葉も性を越境する事象に対して使用され、性の特徴を医療的な介入によって女性化あるいは男性化させ、特に身体の性役割に不可逆的な変化を起こすことを望む状態やそのような状態にある人を指す。古くから現在に至るまで、彼らの多くにとって身体と反対の性ホルモンの投与が、医療的介入の選択肢の一つとして重要であるとされてきた。女性から男性への移行を望む者(Female-to-Male: FTM)に男性ホルモンを投与することで現れる変化についても多くの先行研究があるが、これまでの研究は身体的な変化、心理面の変化の解明が別々に行なわれてきた。この男性ホルモンの投与は、身体的男性が通常第二次性徴で獲得する性の特徴を伸ばして元の性の特徴を減らし、社会的に新しい性で生きることを容易にすることでより良く生きられるようにする医療的対応である。性別移行は本人の主観的な評価こそが重要であると言われるが、実際の変化と本人の治療効果の実感・満足度には乖離があり得ることも知られている。そのためホルモン投与がもたらす身体への生理的な変化が、FTMの生活や心理にどのように影響を与えているかまでを総合的にみて治療の評価を行なう意義は大きい。本論文では測定値や第三者評定による客観的指標と、FTM本人の主観的評価の双方からホルモン投与の効果を同時に測定することを試み、二方向からの評価に関連がみられるかを検討した。第I章では双方の評価を定量化しやすい音声に特化した研究を行い、第II章ではより広範にホルモン療法の効果をみるため、多様な心理特性と身体変化を同時に測定する調査を行なった。

第 I 章：研究 1 音声に対する男性ホルモン投与の影響

研究 1-1：ホルモン投与による話声位基本周波数の変化のケースレポート

目的：従来はホルモン投与による発声能力の指標として母音発声時の話声位（周波数）を評価をすることが多かったが、本研究ではより実際の生活に則した音声の評価するため文章を朗読する音声を用い、ホルモン投与による変化をとらえることを目的とした。

方法：18歳のFTM1名に指定した文章を発声してもらい、投与開始後2か月から5か月までの3か月間に計6回、音声の録音を行なった。その音声から高さに関するパラメータを算出した。

結果：3か月で文章音読中の基本周波数は149.4Hzから101.5Hzへ、上限基本周波数は179.3Hzから115.6Hzへ、下限基本周波数は124.3Hzから89.7Hzへそれぞれ低下が見られた。基本周波数と上限基本周波数に関しては2週間ごとの測定の度に値の低下が見られた。低下が顕著だったのは2か月目から3か月目の間であった。

研究 1-2：ホルモン未投与者と投与者の話声位基本周波数および音声への満足度

目的：横断研究により統計的にFTMの声の高さの特性を明らかにする。また聴取実験よりFTMの声が男性として判定されるか否かを明らかにする。加えてFTMの自身の音声への満足度を明らかにし、その満足度が音声の特徴や他者からの性別判定と関連をもっているかも検討する。

方法：ホルモン未投与のFTM23人、ホルモン投与中のFTM32人（研究1-1より最低投与期間を4か月と設定）、統制群男性14人、統制群女性10人を対象に、その文章発声を録音した。その後自身の音声の満足度について回答を依頼した。録音した音声を用いて音響分析により音声の高さに関するパラメータを算出し、28名の一般男女に各音声の話者の男女判定と女らしさの評価を求める聴取実験を行なった。

結果：投与群は、音声の高さや他者からの音声の性別の知覚のされ方が統制群男性と変わらなかった。一方で、投与群では声の高さや女らしさは声の満足度とは関連せず、これは統制群男性と異なる結果であった。未投与群が文章発声に用いる音声の下限は統制群女性と統計的には差がなかったが、音声の高さによって他者に男性と知覚される者と女性と知覚される者へと二分された。未投与群はこうした他者からの判定の状況を正しく捉えていることも分かった。また低い音声が出せる者ほど高い満足度をもっていた。ホルモン投与中のFTMは完全に男性として他者から認識されていても、声の不安定さを不満要素としてあげる人が多くいた。

研究1の考察

ホルモン未投与群 FTM は低い声が出せるかどうか、他者から男性と認識され得るかどうかを適切に判断し、それを自身の音声の満足度と結びつけていた。他方、ホルモン投与群 FTM は男性として認識されるのに十分な低い声が出せることは前提であり、それがそのまま高い満足度に繋がる人は半数程度であった。トランスジェンダーでない男性と異なり、より男らしい声と評価されることは価値基準とはならないことが示された。

第II章：研究2 心理指標および身体指標に対する男性ホルモン投与の影響

研究2-1：ホルモン未投与者と投与者の心理特性および身体への満足度

目的：従来の研究で考慮されてこなかった気分変動に大きく寄与する月経周期とホルモン投与からの日数の二点を考慮し、質問紙を用いた横断研究を行ってFTMのQOL・身体満足度などについて明らかにする。

方法：未投与群37名の卵胞期、投与群38名のホルモン投与3-7日後（体内の投与した男性ホルモンが高濃度と予測される）と次回投与日の前日（低濃度と予測される）に質問紙の回答を求めた。

結果：質問紙実施のタイミングを統制した上でも、先行研究同様ホルモン投与群は精神面の健康や自尊心、身体満足度が高く、ホルモン未投与群は負の気分が高いことが示された。ホルモン投与中のFTMは投与した男性ホルモンが高濃度と推測される時にQOLの「身体機能」の「身体的攻撃」が高まることが示された。

研究2-2：ホルモン投与による心理特性および身体への満足度と実際の身体の変化

目的：研究2-1で示されたホルモン投与群のQOLや自尊心、身体満足度の高さ、負の気分の低さは、ホルモン投与を行なうことで変化したものか、投与の効果ではなくFTM本人が元来持っている特性によるものかについては、横断研究のプロトコルからは判別できない。また主観的評価だけでは身体の実際の変化とFTM本人が自覚する変化が一致しているかも不明である。そこで投与開始時点から縦断的に身体測定と心理指標の測定を行い、ホルモン投与による身体の変化が本人にどのように認識されているか、それはどのタイミングでこういった心理面に影響を及ぼすかを明らかにする。

方法：ホルモン投与開始直前のFTM11名をリクルートし、男性ホルモン投与治療開始1か月前からホルモン投与開始直後の2か月およびその後3か月ごとに身体測定を行い、質問紙への回答を求めた。

結果：筋肉の増加といった身体の変化とその変化の自覚はほぼ連動するが、音声について

は変化の自覚が有意な身体の変化に先立って報告されていた。一方、身体の満足度が上昇するのには、実際に変化が開始したと自覚してから2-12か月を要していた。身体の満足度が予想以上に大きな変化が起こった場合はそのタイミング、また予想程大きな変化が起こらなかった場合では変化が一通り終わった後のタイミングであることが示唆された。心理指標では、ジェンダー・アイデンティティのいくつかの項目が投与開始時より上昇し、他者の認識する性別と自己の認識する性別の一致が9か月で、自分の性別が社会との繋がりを持てる感覚が12か月でそれぞれ統計的に有意に高くなった。しかしそれ以外の指標はホルモン投与に伴う一連の変化に連動せず、気分、自尊感情には変化がみられなかった。QOLの心の健康は投与開始1年で一時的な悪化がみられ、その他の項目には変化がみられなかった。

研究2の考察

身体の実際の変化とFTM自身がそれを心理的にどう捉えるかを追った研究はこれまでになく、本研究で新たな知見が得られた。精神的な健康度は、横断研究では投与を行なっている者のほうが行なっていない者よりも高かった。しかし縦断研究では、ホルモン投与による身体の変化とその実感という一つの尺度だけではこの精神的な健康について適切な説明がつかない。FTMのストレスコーピングの特徴に着目した研究が国内でも行なわれており、今後このような治療効果の実感と心理指標を繋ぐ研究が求められる。また欧米の研究で指摘されているような性別を移行する過程での社会や家族の受容、サポート状況、手術による消耗や合併症といった別の側面も合わせて検討をすることにより、FTMの性別移行とその過程での心理変化をより詳細に明らかにする事ができるだろう。

第三章：総合考察

本論文では男性ホルモン投与による薬理効果と本人の治療効果の実感やそれに対する満足度をそれぞれ明らかにし、またこの客観的指標と主観的指標の関連性を調べ、FTMがどのように治療効果を実感するのかを検討した。欧米を中心としたトランスジェンダー／トランスセクシュアルの脱病理化の潮流、日本国内の診断・治療のガイドラインの改訂など性別移行をとりまく状況は今も変化を続けている。ホルモン投与に対して当事者が主体的に取り組み、治療者も多様化する当事者の個々のニーズに対し適切な対応を行う上で、本研究が示したデータが有効に用いられ、身体の変化、それにともなう心理的变化双方に着目した治療効果のデータが今後も蓄積されていくことが期待される。